

メールレター(54)

東京オリンピック

夏だというのに、雨模様には振り回される日々です。テラスの野菜もさほど美味しく実らないうちに夏が終わってしまうのかもしれませんが。

そんなある日、どうしたわけか、雀が窓から舞い込んできました。まだ若そうな、飛びなれない雀です。バタバタ羽ばたき、天井の梁(口フトなのです)のどこかにとまったようです。折しも預かっていた義理の長男のブランド猫が、突然野性を取り戻し、雀を追ってピョンピョン梁を飛びまわり始めたのです。歯をむき出し、よだれたらたら。。。雀は出たいのに、窓が見つからず、焦りまくりバタバタ羽ばたくばかりです。羽が抜けて宙を舞っています。

するとどうでしょう。窓辺の向こうに両親と兄弟らしい雀一家がやってきて、こっちこっちと合図して羽ばたいているのです。子雀を探しながら行ったり来たりしています。

「何て美しい家族愛！子供が心配で連れ戻しに来たのね。」

マダム田中は心配になりドリトル先生に、

「大丈夫かしら、子雀？出られないみたいよ。猫にとられないかしら？」

「この猫は心配なし。飼い慣らされて野性がコントロールされてるから。雀はそのうち1人で出て行くから大丈夫だよ。入ってきた以上は、必ず出て行く。動物は自分の始末は自分でつけるから。始末ができないのは人間だけかも。」

やがて、猫は子雀を諦め、梁からおりて居心地の良いソファにどっさりと横たわりました。

あー、なるほど野性のランクスを掛け合わせた美しい猫も、餌に困らないと、遊ぶ程度の野性になってしまうようです。子雀もいつの間にか姿を消してしまいました。家族の所に戻ったようです。

家族愛も難しいものです。学校が夏休みになり、遠方から義理の次男が子供達を連れてやってきました。先立って孫たちから送られてきた、料理のリクエストメニューに答えて2日ばかりで作った料理でおもてなしです。娘一家もやってきました。12歳の孫は、何やらスーツケースを引きずってやってきました。

「何、貴方、それ？」

「今夜ここに泊まるから」

「えーっ！そんな勝手に。」

「そうそう、2週間ほどおばあちゃん(主人の前妻)の所にいるから、その間にまた来るから。今度、きのご専門店で連れて行って。」

「いいとも、いいとも」

ドリトル先生は上機嫌でオーケーしています。マミー和子は料理と接待で疲れているというのに泊まり？この良くしゃべる子の相手をまた2日もするなんて。。嬉しそうに料理を食べる義理の次男一家と娘一家、興奮してしゃべり続ける金髪のイケメンの孫。この12歳の孫は、

日頃から田舎の森で茸採りをしているので、モンリオールに来たら、町にたった1軒の茸専門店に行く決めていたようです。結局、この孫の茸屋さんのお付き合いは、ドリトル先生ではなく、マダム田中がする羽目になってしまいました。家族愛もどこかバランスに欠けているようです。

オリンピックが始まりました。オープニングセレモニーは、1800のドローンが描く地球儀を除くと、あまり印象に残らない、控えめなものだったような気がします。いえ、ありました。一つだけ印象に残ったものが、やたらと長い開会のスピーチです。ドリトル先生は、オリンピック委員会会長のスピーチを1分と聞かず寝てしまいました。翌日、マダム田中はドリトル先生に、

「聖火台点灯まできちんと見たわよ。それにしても長いスピーチだったわね。特にあのバッハは、同じことを何度も繰り返して長すぎたわ。」

「そうだろうね。昔から、ベラベラしゃべる、<見て見て> おじさんだったから。昔と変わっていない。」

「えっ！会ったことあるの？」

「モンリオールオリンピック大会の時にインタビューしたり食事したりしたことがあるんだ。オリンピックの宣伝を市民向けにしたいから記事を書いて欲しいと女性雑誌社から頼まれてね、僕の分野のフェンシングを選んで、会ったのがドイツのバッハ選手だったんだ。とりとめなく良くしゃべる男だったよ。野心が強い印象を受けたね。もっとも、僕の記事は大成功だったけど。」

当時、ドリトル先生は、獣医学の勉強の傍らにアルバイトで時々記事を書いていました。フランスでのフェンシング歴も長く、モンリオール大学ではフェンシング部でお稽古をしていたこともあり、審判の1人としてモンリオールオリンピック大会に参加してもいたようです。

「だから、僕はスピーチを聞く気にはなれなかった。」

こんな時に会った人が、オリンピック委員会の会長となり、今、東京にいるとは。

ドリトル先生は、この大会でのロシアの選手の卑劣な不正を見て、騎士道精神に反すると落胆、絶望しフェンシングを切り捨て、その後一切エペを手取ることはありませんでした。

剣道に進んでいくのはこの数年後のことです。失われた騎士道精神が武士道として心の中で形づけられていったようです。

マダム田中は、男の哲学とは関わりなく、カナダの選手が勝つと拍手をし、日本の選手が勝つとまた拍手をするオリンピック観戦の日々です。